

研究報告書

研究課題：B（一般）

（平成25年度）

平成 27年 6月 10日

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 高山昭三 殿

研究施設 国立がん研究センター中央病院

住 所 東京都中央区築地5-1-1

研究者氏名 宮内 眞弓



（研究課題）

病院栄養士におけるがん補完代替医療への理解に関する実態調査

平成26年 2月 10日付助成金交付のあった標記指定課題について研究が終了致しましたのでご報告いたします。

病院栄養士におけるがん補完代替医療への理解に関する実態調査

1. 背景

現在がんは不治の病ではなく「がんともに生きる」時代となっている。しかしがんの情報はインターネットなどの普及により種々の健康医療情報の入手が容易かつ蔓延する中、患者自身の健康管理への関心、治療の選択における自己決定の高まりなどにより、がん患者の選択の補完代替医療の利用が増加してきている。がんの補完代替医療ガイドブックによるとがん患者の補完代替医療利用の45%であり、緩和ケア病棟の利用は6割を超えている。代替医療の9割は健康食品といわれており、使用金額も月平均57,000円と高額になっている。情報の利用の仕方によっては、患者や家族の人生を左右することもあり注意が必要である。

これらを考えると我々栄養士が補完代替医療を正しく理解し患者へ伝えることはがん治療に重要と考える。これらを踏まえ病院に勤める栄養士の補完代替医療に関する実態調査を行い、患者の相談をしっかり受け止め、患者の求める正しい情報を発信していく必要がある。

2. 研究目的

「がん患者への栄養介入」及び「補完代替医療における認識・理解」をはじめとする実態調査を行い、栄養士の現状を把握すると共に補完代替医療に関する正しい情報を共有することで、今後のがん患者の栄養管理の一助としたい。

3. 調査方法

<対象施設>

国立病院機構、国立高度専門医療研究センター、ハンセン療養所 及び 国立以外のがん専門病院に勤務する栄養士

<方法>

記述式アンケート方式とし、調査用紙の配布・回収はメールにて実施究目的

3. 結果

栄養管理に関する調査では、治療後の栄養介入の目的は有害事象への対応が4割を占めていた。栄養介入時に重視する基準については、食事の摂取状況や食欲の有無が上位を占めていた。年代があがるごとに医師の指示を重要視する傾向にあった。年齢とともにチーム医療の重要性を理解しているためと考える。患者から約28%の栄養士が補完代替医療について相談を受けおり、75%が健康食品やサプリメントであったがゲルソン療法25%、マクロビオティック13%であった。患者は補完代替医療にがんの抑制や消失、免疫力アップを期待して栄養士に相談しているが、我々栄養士は意欲の向上、副作用の軽減を期待していた。補完代替医療に関してはあまり理解していないが知識を深めたいとの回答が7割以上あった。使用に当たっては、安全性、療に悪影響を与えない、機能性の確かさなどをあげている。

4. 考察

今回の調査から補完代替医療について相談を受けた栄養士は28%であったが、栄養士から積極的な働きかけは少ないことがあきらかになった。患者の補完代替医療の利用率・関心度に比較して栄養士が直接的に提案をおこなうことは少なかった。また、患者家族の補完代替医療に関する期待度と栄養士の介入目的の間に差が見られた。

自己の栄養介入に関する患者満足度を問う項では、約半数の栄養士があまり満足していないとの回答であったが、がん患者の症状は複雑多岐にわたりその対応に日々苦慮しているためと考える。患者の意欲・満足度向上のために補完代替医療の知識を深めたいと考える栄養士は多くいるが、情報収集や情報共有が十分とはいえない。患者の要望に対しエビデンスに基づいた栄養介入を実践できれば、今後もっと効果的ながん患者のQOLへの貢献に期待が出来る。患者に適切な対応を行うためにも、諸知識を習得可能とする体制作りが必要である。

5. まとめ

現在は、補完代替医療を無視して患者・家族と向き合うことは難しい。栄養士はエビデンスに基づいた知識が必要であり、その知識を患者に提供する立場にある。また、患者の心身状態を考慮の上、患者の気持ちにより添った介入が求められる。これらのバランスの取れた患者対応こそが、真の患者 QOL 向上に繋がるものと考えている。